

Title	Antonfrancesco Grazzini detto il Lascaの『晩餐』の輪郭
Author(s)	米山, 喜晟
Citation	大阪外国語大学論集. 4 p.221-p.248
Issue Date	1990-12-15
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79521
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

Antonfrancesco Grazzini detto il Lasca

の『晚餐』の輪郭

米 山 喜 晟

第一章 作者について

本論は筆者が約十年来続けて来たイタリアのノヴェッラ集を紹介する試みの一部で、十六世紀の文学史において、既にそのノヴェッラ集の内容を紹介した Matteo Bandello に劣らず重要だと評価されることすらある⁽¹⁾、Antonfrancesco Grazzini (以下でG. と略、他の人名も同様の省略を行う) の『晚餐 (Le Cene)』の内容の概略の紹介である⁽²⁾。まず簡単に諸種の文学史や文学辞典⁽³⁾で作者の経歴を眺めておくと、G. は1503年 Medici 家を追放して共和制下にあったフィレンツェに生まれ、1512年の Medici 家復帰や1527-30年の二度目の Medici 家追放と共和制をめぐる戦争や同家の復帰と君主制の成立等混乱の中を生きた文人で、自らは無事に薬種業を営むかたわら詩作や劇作に活躍し、1540年には同好の士と共に、標準的なイタリア語を確立するための学会 Accademia degli Umidi を結成し、gli Umidi 「水に濡れたもの」という学会の名に因んで il Lasca 「ウグイ」と自称したため、ラスカの通称で呼ばれることが多い。しかし人文主義者のように古典的教養に恵まれず、むしろ実作者的性格が強くて誇り高かった彼は、il Borghini, il Varchi, il Giambullari⁽⁴⁾ら、現代でも歴史や言語史の研究者としてその業績が高く評価されている、学会の中心的メンバーだった学者たちとの関係が次第に悪化したために (言語の起源に関して、ヘブライ語起源説を説く Giambullari と対立したことが直接の原因だとも言われる)、1547年には学会から追放されてしまう。その背後には、共和主義的気風が強い文学者らの活動に不信感を抱いていたトスカーナ公 (当時) Cosimo I dei Medici の干渉によって1541年に同学会が Accademia fiorentina として編成替えされたことへの不満があったとする説もある。だが1566年には Lionardo Salviati⁽⁵⁾の仲介で再入会が許され、さらに1582年には同じ Lionardo Salviati 等と共に、優れた辞典によって今日も名高いクルスカ学会 Accademia della Crusca を創立し、その二年後に長寿を全うした。

家業が薬屋と言う点では、ルッカのノヴェッラ作家 Sercambi と共通しているが、薬屋が本屋や文房具点を兼ねていて一種の情報センターの役割を果たしていた十四世紀のルッカとは違って、分業が進み優れた専業書籍商を有していたフィレンツェでは家業の役割はそれほど重要ではなかったようだが、『晚餐』作品 I-2 が Sercambi の作品 III に似ている⁽⁶⁾ことなどから、G. がルッ

カの庶民的な作家に対して（独裁者の相談役と微温的な共和制の支持者とでは、政治的な立場という点では大いに違っていたはずだが）、一種の親近感を抱いていた可能性が感じられる。専門的知識に身を固めた知識人に対する、一般的市民としての反感や孤立感には、共通のものが認められるとも言えよう。実はまだ定説化している訳ではないようだが、PlaisanceのようにG. が薬屋の店主だった事実を否定して、むしろ貧しい独身の徒食者だったとし、そのアウトサイダー的性格を強調する立場⁽⁷⁾もあるが、既に見たような葛藤を体験しながら、生涯フィレンツェをその活動の場とし続けたという事実は、彼には Medeci 権力から独立した、ある程度安定した生活基盤があったことを推測させる。彼はこの時代の多くの文学者の様に各地を転々としなかったが、もしその必要があればそうしていたにちがいないし、Burchiello のような庶民的詩人でさえ亡命しているのだから、もしG. のフィレンツェにおける生活の基盤が弱ければ、その方が生き易かったはずである。

今日でこそG. は『晩餐』の作者として最も知られているが、この作品集は彼の生前には刊行されず、その死後も執筆後実に二世紀後に、ロンドン刊と称して実はパリでその初版が刊行されたとされている⁽⁸⁾。こうした出版はいかがわしい本を世に出すための常套手段だったようだが、大した危険思想を含んでいる訳ではないので、やはり若干の猥褻さと反聖職者の表現がその原因だと思われる。C. Verzone によってフィレンツェから一応信頼できる判本が世に出たのは、作者の死後三世紀余り過ぎた1890年のことであつた。勿論その手稿の存在が知られていなかった訳ではないが、一般のイタリアの読書人には入手し易い作品だったとは言えないだろう。

しかしだからと言って、この作者が無名だったという訳ではなく、詩人及び劇作家として結構名声を得ていたとされている。詩人としては、当時 Pietro Bembo (1470-1547) の影響の下で流行の全盛期を迎えつつあったペトラルカ風の抒情詩に対して批判的で、フィレンツェの民衆的詩人 Burchiello (1404-1440) に代表される滑稽詩の伝統を最も愛したとされているが、詩作の実践においてはペトラルカ風の作品も結構創作しているようである⁽⁹⁾。だが彼はまた1548年にはペトラルキズモを辛辣な冗談によって冷かした Francesco Berni (1497 o. 98-1535)、1552年には Burchiello の詩集を編集して刊行し、それ以外にも自作と共に無名の滑稽詩人の作品や Firenzuola や Varchi のカーニヴァル・ソング等を集め出版しているそうであり、詩作と並んでそうした編集や刊行の活動が彼の業績の重要な一部門だったと言えそうである⁽¹⁰⁾。それらの活動においては、彼の嗜好が鮮明に現れている。またこうした活動が行えたという事実自体、この種のジャンルに対する彼の鑑賞眼が、同時代の読書人の間で定評を得ていたことを意味している。

G. のもう一つの活動分野は劇作だが、残念ながらその製作年代に関して、正確なことは余りよく分かっていないらしい。後にファシズム体制の理論的支柱となり、第二次大戦後暗殺されたが、哲学や文学に関する業績も『イタリア百科事典』の編集を指導する等の功績も軽視できないあの Giovanni Gentile がわずか二十歳の時（1895）にG. の喜劇についての研究を発表し⁽¹¹⁾、Benedetto Croce の絶賛を博したことが、その後の二人の深い友情の契機となったことは

有名なエピソードである。Porcelli は、Gentile のその研究を参照しながら、従来 Machiavelli の作品だとされていたが現在は G. の作品だと見なされている *Il Frate* が上演された時期を、1540年の主顯節（一月六日）だと確定した上、*La Gelosia* と *La Pinzochera* はそれ以前、*La Spiritata*、*La Strega*、*I Parentadi* の三作品は1541年から1549年までの間、*Sibilla* は1553年に作られたとし、*Arzigogolo* は1566年以後の作品だと推定している⁽¹²⁾。なお他にも何篇かの喜劇や宗教劇が書かれたが散佚したらしいとされている。G. の死の少し前の1582年に前述の8篇中 *Il Frate* と *Arzigogolo* を除く6篇が一巻にまとめて刊行された⁽¹³⁾という事実からも、劇作家としての彼は、詩人の場合と同様、決して不遇ではなかったと見なすことが出来る。Porcelli は、G. の喜劇を検討した結果、1542年を境にして、宗教的形式主義に対する G. の態度が柔順になっていると指摘して、その年に法王 Paolo III が検邪聖省を創設し反動宗教改革に基づく締め付けが強化されたという事実によって説明している⁽¹⁴⁾。その当否はともかく、この時代の空気を想像するためには参考になる指摘である。後にも触れる通り、彼がノヴェッラを書く以前に喜劇作家だったことは極めて重要で、彼が作り上げた二つのジャンルの世界はほとんど重なっていて、たとえば *Il Frate* や *La Gelosia* の粗筋をそのまま緻密に肉付けして行けば、『晩餐』中の一篇には近い作品が出来上がる。

G. が『晩餐』それ自体に着手したのは、決して若い時期ではないが、遅くとも1549年以前の事とされていて、恐らく1544年から49年の間のことと推定されている。二～三の作品には改作の跡が見られ、Magliavecchi 手稿として *variante* が残っているものもあるが、結局当初計画された30篇中22篇とその *variante* 3篇だけしか書かれなかったらしい。その内の3篇はかなりおそく、1572年以後に書かれたものと推定されている⁽¹⁵⁾。

第二章 『晩餐』の輪郭とその内容

第一節 『晩餐』の舞台設定

まず従来の例に習い、『晩餐』に含まれている全22話がいかなる場所と時代とを舞台として展開されているかを眺めることから着手しよう。まずその場所については、以下の表が示すとおりである。

フィレンツェ（城壁のすぐ外1を含む）	13（59.1%）
フィレンツェに近い郊外	1（4.5%）
フィレンツェ（狭義の）領域部（田舎）	1（4.5%）
フィレンツェ＋フィレンツェ（狭義の）領域部（田舎）	2（9.1%）
フィエーゾレ（まだフィレンツェは存在しない頃）	1（4.5%）
ピサ	2（9.1%）

プラート	1 (4.5%)
ミラノ	1 (4.5%)
合計	22 (100%)

合計22話の13話と全体の約6割がフィレンツェ市内の出来事として描かれており、郊外や狭義の領域部にまたがるものを含めると18話(81.8%)に達している。さらにフィレンツェ以外の舞台の一つは、地理的にも極めて近いうえに、久しくフィレンツェの領土に所属していて、ある意味では領域部の村落以上に親しまれた、まさしく隣の田舎町そのものであるプラートであり、他の二つは1406年以来フィレンツェの領土に編入されていると共に、かつては強力なライバルだったがゆえに、かえってその没落ぶりが目立ち、その分だけ余計にフィレンツェ市民に軽んじられているピサであって、共にG.にとっては心理的に扱い易い、フィレンツェの属領都市に他ならない。それらを含めると、II-9のみを除いた全22話中の21話(95.5%)までが広義のフィレンツェ、つまり当時のトスカナ公国(後の大公国)を舞台にした作品であって、こうした事実は、この作者がいかに精神的にフィレンツェのみに依存して生きかつ創作したかを、余すところなく証言している。実際この作者は、文化的にも、言語的にも、生まれ育ったフィレンツェを抜きにしてはあり得なかった存在であり、同時にフィレンツェ文化の成熟の見本だったともいえる。

既に我々は、幾つかのイタリアのノヴェッラ集に関して同様の計算を行って来たのであるが、その舞台に関連してこれほどまでの一都市への集中ぶりは、いままでに例が無かったことは確実である。後に見るとおり、こうした数字は作者の創作方法に負うところが大きいことは勿論だが、それにしてもここまでフィレンツェのみに集中している以上、ここに同市民の意識の狭隘化が反映していると考えても、あながち見当違いとは言えないであろう。十六世紀の後半のイタリアには「小春日和 (l'estate di San Martino)」と呼ばれる最後の好景気が訪れ、既に早い時期に建築ブームを体験していたフィレンツェを除く各都市で建築ブームが発生したされているが⁽¹⁶⁾、フィレンツェにも同様の好景気が訪れたことは、羊毛製品の増加等⁽¹⁷⁾からほぼ確実に裏付けられていると言える。そうした好景気の背後には国際的な交易や人的交流があった筈である。そう言えば確かにこの作品にもI-1のファエンツァの医師のフィレンツェ移住、I-2の若い商人のリヨンへの往来、I-3の若い貴族のローマ及びナポリへの逃亡、I-5のジェノヴァ商人のピサへの移住とピサの金銀細工師のマルセーユへの旅、I-7のシエナ、フィレンツェ人聖職者のプラート住まい、I-8のロンバルディーアの修道院長のローマへの旅、I-10のバリ帰りのフィレンツェの医師やII-1のバリ帰りでピサに住み着いたミラノ人医師、II-5のフィエーゾレ領主に嫁いだローマ貴族の娘、II-7のローマに旅するミラノ市民等の存在、III-10の重大な公務で不明の地へ旅するLorenzo il Magnifico等々と言った、移動や移住の実例が一応は記されているが、その大半は叙述の必要上やむを得ず最少限度触れられているだけに過ぎず、行き先も北はバリ、リヨン、南はナポリ、ローマあたりが限界で、フランスを除くと大半はイタリア半島内、それも中部イタリアに集中していて、これまで見て来た中では例外的に狭い。しかもI-

3 (狂人扱いされたことを恥じ、ナポリへ行って商船の書記そして船主になったという貴族の話) にI-2、I-5を加えた3話に含まれているものが、辛うじて『デカメロン』や『三百話』に多く見られた「商人の叙事詩」⁽¹⁸⁾風の旅だと呼べるものに過ぎず、さらにその3話においても、他の移動の場合と同様作者自身にそうした旅を描こうとする意図は全く認め難い。こうした事実を見ても、前述の二つの古典的作品とは全く異なった心性から生まれた作品であることは明白である。

次に事件が設定されている時代について眺めると、まず先に見た場所の場合に比して、一つの顕著な違いが認められる。それは場所特にフィレンツェ市内や領域部の地名に関して、G. は極端に詳細な記述を行い、多くの場合登場人物の経路が具体的な地名と共に記録されているのに対して、時代に関する記述は極めて曖昧で、しかも例外的にわざわざ記されていたり、あるいはヒントとなる事実が含まれている場合には、しばしば余りにも明白な時代錯誤的な誤りが認められるということである。こうした空間的精密さと時間的なルーズさとのアンバランスは、すでにSercambiの作品において筆者が指摘⁽¹⁹⁾しておいた特性であって、必ずしもこの作者一人に特有のものとは言い難いけれども、後に見るとおり、この作者の場合、やはり独特の事情があることを認めたほうが良さそうである。

古代	1 (4.5%)
11-2世紀	1 (4.5%)
かなり昔	2 (9.1%)
13世紀末-14世紀初頭	1 (4.5%)
14世紀後半	1 (4.5%)
1406年以前	1 (4.5%)
Lorenzo il Magnificoの時代	4 (18.2%)
1520年代	1 (4.5%)
それ程年を経ぬころ	6 (27.3%)
記述もヒントもなし	4 (18.2%)

多くの場合語り手の冒頭の言葉に基づくが、むしろそうした手掛かりが無い場合の方が多いので、話の中の登場人物等をヒントにして作り上げたのが上掲の表である。最後に示した手掛かりの無いものは、ほとんど近年の話と見なすことが出来そうなので、ほぼ作者が生まれてから後の出来事として語られているものが、全体の半数を占めている。問題はG. の記述がかなり時代錯誤的な誤りを含んでいることで、例えばLorenzo il Magnifico (1449-92) 自身が生意気な医師に悪戯を仕掛けるIII-10の中で、滑稽詩人Burchiello (1404-49) がその仕掛人を見破って医師のために対策を講じるという重要な役割を演じている例などが見られる。こうした誤りは、作者がII-2の冒頭で1348年のベストを1399年のいわゆる白衣団のベストと混同した場合の様に、単なる無知や錯覚に基づくものとして片付けてしまっても良いものであろうか。特に重要だと思わ

れるのはⅠ－３、Ⅱ－４、Ⅱ－６、Ⅲ－１０の４話に（必ずしも常に全員揃ってでは無いが）登場している Scheggia、Pilucca、Monaco、Zoroastro らのグループと Lorenzo との関係である。少なくともⅠ－３では、Scheggia らの悪戯のために狂人扱いされた若い貴族 Geri Chiaramontesi が復讐を断念した原因の一部も、その悪戯が Lorenzo の耳に達して喜ばれたことにあるとされている以上、彼らが同時代人であるとされていることに疑いの余地は無い。しかしこれらの人物の多くは、余り有名ではないものの、むしろ十六世紀に活躍した人々であって、例えば Pilucca の場合⁽²⁰⁾その本名は Paolo Geri、彫刻家および建築家として活躍し1572年にヴェネツィアで死去したとされていて、Lorenzo の時代には合わない。おまけに彼は G. 自らその創立に加わったかの Gli Umidi 学会の12人の創立者の一人だとされている。こうした事実を考慮すると、G. は故意にこうした時代錯誤を演じているのだと結論せざるを得ないであろう。そう言えば G. は Burchiello の作品集の編集者でもあった。だから少なくとも Lorenzo の時代と Burchiello の時代が重ならないことは分かっていたはずである。やはりこの場合にも恣意的なアレンジが行われていると見るべきである。このようにフィレンツェ史上のスターを任意に登場させるやり方は、彼が劇作家だったことと無関係ではなさそうである。時たまベスト等の歴史的事件に触れることはあっても、作品中の事件はそれらとは完全に無関係である。それらはごく一部の例外を除くとすべていつの時代でも起こり得る喜劇又は悲劇なのだ。その意味では Cosimo I の時代にしようと、Lorenzo の時代にしようと自由である。しかし Cosimo の名前を一度たりとも挙げず、Lorenzo 時代をこのように設定していることは、無意味でありえない。恐らく G. はフィレンツェとその文化がすでに盛りを過ぎたことを強く自覚していたに違いない。だからせめて悪戯者たちの活躍ぶりだけでも Lorenzo の時代に設定したかったのではないだろうか。

第二節 『晚餐』の登場人物

続いてまず例のごとく、貴族N、民衆P、聖職者Rの三分法に基づいて『晚餐』の登場人物の階層を眺めることにする。既に他のノヴェッラ集に関しても同様のことを述べたが、特に本作品の場合には貴族と民衆とを区別することが著しく困難である。その理由は今更言うまでもなく、フィレンツェ及び中世イタリア都市一般における都市貴族の曖昧さにある。とりわけフィレンツェではコムネ自体が市民たちに騎士の位を与えたことや、豪族の参政権を否定した『正義の規定』の存在のために、騎士となることが建前上政界からの引退を意味して、当人にとって必ずしも有利なことではなかったことが、事態を一層ややこしくしてしまった。例えば Sacchetti によってかつてはポポロの典型のような存在だったが、すでにそう見なすには強力になり過ぎていることが証言されている⁽²¹⁾、Medici 家の場合に端的に現れているように、有力商人と貴族との境目が極めて曖昧で、当人たち自身ある時点ではよく分からなかったのではないと思われるケースが少なくない。特に問題なのはかつての財産や特権を失った貴族の場合で、たとえ名門の末裔だっ

たとしても、浮沈を繰り返すうちに貴族としての自覚を完全に喪失した例も少なくはなかったものと思われる。当時のフィレンツェでは原則として財産が男子によって均等相続されていたことが、こうした過程を促進したことは容易に推察し得よう。また均等相続によって同姓の別家が多数存在していたため、たとえ確実に同一の宗族に所属する同姓の家族であっても、一方が貴族で他方が民衆というケースも十分に存在し得る。そうした事情を勘案した結果、作者が特に貴族だと明記しているケースのみを貴族と見なすことにして、主要な登場人物を計算した結果が以下の通りである。(I-4は全員貴族の青年たちの集会と見なしている。)

Pのみ	9	(40.9%)
Nのみ	2	(9.1%)
Rのみ	1	(4.5%)
P+N	5	(22.7%)
P+R	2	(9.1%)
N+R	2	(9.1%)
P+N+R	1	(4.5%)

まず階層同士の比較から着手すると、Pに関連のある作品は77.2%と約8割に達して、当然のことながら最も多い。続いてNに関連した作品は45.4%、Rに関連した作品は27.2%である。この作品において聖職者は単に関連する作品が少ないだけではない。その中で演じている役割も余り立派だとは言えそうもない。まずRのみのI-7の場合、シエナ出身の神父がフィレンツェの見習い聖職者に悪戯を仕掛けて、逆にやりこめられてしまう話で、シエナ人神父の臆病振りは滑稽である。民衆と絡む2話の内I-6の場合神父が田舎の女に一杯食わすが後で復讐されて怪我をしていて、甘く見てもほぼ互角、I-7の修道院長はフィレンツェの職人達に散々な目に合わされている。貴族と絡む2話の内II-3では、徳高い修道士が若い令嬢の言葉を信じこみ、II-8でも貴族からひどい目にあわされた司祭が上手に損害を取り戻したというだけで、復讐に成功している訳ではない。一応P+N+Rとして分類したIII-10の場合、実質はP+Nとも見なし得るもので、聖職者は貴族の手先に過ぎない。こうしたノヴェッラにおける聖職者の弱さがけっして普遍的なものではないことは、すでにMasuccioの作品の分析を通して指摘⁽²²⁾しておいた事柄である。それに比べると貴族の役割ははるかに重要である。実はその参加比率自体、I-1のBisdominiやI-9のMalespiniらを貴族と見なすならばP+Nはさらに9.1%増えて5割を越える可能性があるし、民衆との絡みでも、5話の内貴族が争いに加わらないII-10を除くと、I-3、III-?では民衆に見事にやられてしまうが、II-7、II-9では民衆をやりこめているし、さらに全作品の棹尾を飾る筈になっていて、すべての階層が参加するIII-10では、Lorenzo il Magnificoが、生意気な医師を死者の仲間に入編入してしまう。このように、Masuccioの場合程極端ではないものの、トスカーナのまさに市民そのものの手で書かれたこの作品でも、貴族は十分重んじられている。むしろ再封建化が進行するイタリアで、全員が一応貴族とされている語

り手の口から、これだけ民衆の活躍ぶりが語られたと言うフィクション自体に、フィレンツェの市民社会の根強さを読み取るべきであろう。だがいずれにしても、たとえ一見幼稚な分析でも、案外多くのヒントを得ることができた Masuccio の作品の分析の場合とは違って、以上の分析には何か空しい印象が付きまとうことを、率直に認めざるを得ない。要するにそれは、この作者が今用いた三分法とは全く違った基準で、人を区別していたからだと思われる。その基準とは何か。それは悪戯によって代表される作品の内容とも深く関わっているので、次章で作品の内容と作者の人間を区別する基準について簡単な考察を行う。

第三章 『晚餐』の被害者学

『晚餐』の諸作品の粗筋を分析する時すぐに気付くことは、作品の大半が嘘やペテン、すなわち広義の偽瞞を支柱として成立しているという事実であり、その点で『マンドラーゴラ』に代表される喜劇の世界と著しく似ていると言えよう。勿論そうは言っても多少の例外は認められ、例えばⅠ－９は狂女の行動を見て驚きの余り失心した男に関する奇談であり、Ⅱ－５はフィエーゾレの領主の父と子の悲劇、Ⅱ－９も喜劇と呼ぶには余りにも歯切れの悪い、日常的で実話的な婚約不履行の話に過ぎない。しかし後の二話はいずれも重大な裏切りを含み、最初の話も騙す気のない相手に勝手に騙されて、相手を悪魔だと信じ込んだ男の話だと考えるならば、やはり約束事や見かけや建前と事実や実質との差を扱った作品だと見なすことが可能である。

それ以外の作品の場合、偽瞞との関連は更に深まり、それを抜きにしては物語は成立しえなくなってしまう。しかし登場人物の偽瞞への関与の仕方は各作品によってそれぞれ異なっており、一概に論じる訳には行かない。あえて分類するならば、自然の悪戯とも呼べるような偶然に生じた状況によって、登場人物自身が受動的にやむなく巻き込まれてしまった事態から身を守るための本来防御的な性格のものと、登場人物の内のだれかが能動的かつ意図的に計画して仕組んだ攻撃的なものとの二種類に分類する事が可能である。一応便宜上前者すなわち巻き込まれ型の偽瞞をそのまま偽瞞と呼び、後者すなわち能動的な計画型の偽瞞を悪戯（いたずら）と呼んで区別したい。勿論こうした分類はあくまで程度の問題で、読む人の解釈次第で誤差が生じ得ることを認めた上で、あえて分類すると以下のとおりとなる。

偽瞞（防御型）	Ⅰ－１、Ⅰ－５、Ⅱ－１、Ⅱ－３、Ⅱ－９（22.7%）
悪戯（攻撃型）	Ⅰ－２、Ⅰ－３、Ⅰ－４、Ⅰ－６、Ⅰ－７、Ⅰ－８、Ⅰ－10、 Ⅱ－２、Ⅱ－４、Ⅱ－６、Ⅱ－７、Ⅱ－８、 Ⅱ－10、Ⅲ－10、Ⅲ－？（68.2%）
その他（既出）	Ⅰ－９、Ⅱ－５（9.1%）

以上の分類の内、Ⅱ－10は偽りよりも偶然の結果に基づく一種の滑稽譚という性格のほうを重視して、むしろ「その他」に分類すべきかも知れない。またⅠ－８を筆頭にⅠ－４やⅠ－３等は余

りにも即興的過ぎて、計画性は乏しいかもしれない。しかしたとえそうしたいいくつかの問題点を認めても、本作品の圧倒的多数が能動的かつ計画的悪戯を基盤として成り立っているという事実是否定出来ない。イタリア語では、前述の悪戯や偽瞞更には嘲弄や悪ふざけまで含めて表現する *beffa* という単語があり、1970年代の初頭にフランスの学者達が、ルネサンス文学における *beffa* の形態と意味について共同研究した際、この作品に関する研究が、『デカメロン』に次いで二番目に取り上げられたのも、恐らくこの作品がいくつかの典型的な悪戯話を含んでいるためであろう。その研究とは、M. Plaisance による「Antonfrancesco Grazzini の『晩餐』における *beffa* の構造」⁽²³⁾で、イタリアにおける大半の研究がそうである、地味な文献学的研究や大同小異の文学批評的研究に対する、フランス人の挑戦とも呼べるような大胆な分析を行っているので簡単に紹介しておく、この著者は精神分析の手法を採用して、作者 G. が悪戯の加害者ではなくてその被害者と自己を一体化しており、マゾヒズム的かつ同性愛的衝動に従って悪戯を展開していて、この作品におけるその典型的な到達点は「去勢」だと指摘している。こうした幻想の基盤をなしているのは、作者が12才の時に父が死んだという事実で、だから『晩餐』には父親は登場しないのだと言う。G. は父の死に罪の意識を感じていて、彼を罰するための「去勢する母」が、作品の額縁に現れる主催者の未亡人を始め度々現れるとし、I-2の本物の去勢の話を始め、Plaisance が去勢とはほとんど等しいと認める残酷な話は、通例女性によって語られている。また G. の父の死に、ほぼ時を同じくした共和国の死を重ね合わせる事も可能だとされ、「去勢する母」は Medici 家の抑圧的権力と同一視されている事になる。G. の同性愛的傾向は作品によっても裏付けられていて、この解釈は伝記的事実と合致している。こうした解釈に関してその是非を論じても無意味に近いが、周知のとおり G. の作品はごく少数を除いて総てが既に過去に先人が用いたモチーフを利用しているという事実があり、その残酷な表現もほとんど彼の独創ではないことを考慮する時、父の死への罪の意識など全くなくとも、こうした作品が書かれ得た可能性がある。作者が加害者ではなくて被害者と同一化しているとするマゾヒズムによる解釈は確かに示唆に富んでいて興味深い、Boccaccio 以来の悪戯表現の伝統において、愚者や老人や田舎者や外人や聖職者達は、しばしば猛烈な悪戯の犠牲者となっているのであり、またたとえばナポリ王国の貴族のグループを土台として生まれた Masuccio の作品集には明かに貴族が民衆をからかう話が多いことから、やはり作者は加害者に同一化するのが伝統的な態度だと考えざるを得ないのだが、この作品は例外なのであろうか。問題が無意識の領域だと反論されればそれまでかも知れないが、はたして現代人相手の精神分析が、この時代のフィレンツェ市民に適用し得るのかどうか、疑問の余地があるだろう。

本論では問題を意識上の世界に限ることにして、この作者がどのようなタイプの人々を悪戯や偽瞞の被害者に選んでいるかを眺めておくことにする。近年の犯罪研究では、特に犯罪の被害に遭い易いタイプを研究した被害者学という分野が発達しているそうだが、イタリアのノヴェッラにおいて頻出する偽瞞や悪戯に関しても、同様の見地に立つことが可能である。本作品の場合に

も、被害者にかなりはっきりした類型が認められることは、一読して明らかである。ただしノヴェッラには、例えば本作品のⅠ－７、Ⅰ－８の場合の様に、加害者が被害者の地位に転落してしまうケースもしばしば見られ、その立場は必ずしも一定したものでは無さそうである。なおⅡ－１０の場合のように、加害者たちが特に仕組んだ訳ではないのに、被害者が発生してしまう場合がある。あまり厳密な定義を行っても無意味なので、適当に取捨選択しつつ、いくつかの類型を数え上げると、以下のようなグループに分けることが出来る。なお偽瞞の結果が幸運をもたらしたⅠ－１や偽瞞や悪戯の被害者と呼ぶのに不適當なⅠ－５、Ⅰ－９、Ⅱ－１、Ⅱ－５を除く。

傲慢な男	Ⅰ－２、Ⅰ－３、Ⅰ－４、Ⅰ－８、Ⅱ－７、Ⅱ－８、Ⅲ－１０
聖職者	Ⅰ－６、Ⅰ－７、Ⅰ－８、Ⅱ－３、Ⅱ－８
田舎者	Ⅰ－２、Ⅰ－６、Ⅱ－７、Ⅱ－１０
外国人	Ⅰ－７、Ⅰ－８、Ⅲ－１０
臆病者	Ⅱ－４、Ⅱ－６
愚か者	Ⅱ－２、Ⅲ－？
老人	Ⅰ－１０、（Ⅲ－？） （ ）は推定による。

特にこれと言った特徴のない市民の一家が貴族に騙されるⅡ－９のような例もあるが、やはり被害者には類型が見られる。Ⅰ－９も明かに臆病者に属している。女性は極めて少なくⅠ－６とⅡ－９ぐらいだが、Ⅰ－６でも立派に報復している。以上の分類を整理すると、イ．性格的欠陥（傲慢）、ロ．アウトサイダー（聖職者、田舎者、外国人）、ハ．弱者（臆病者、愚か者、老人）の三つの群に分類でき、イ．とロ．の両群に同時に属すると激しい暴力によって排除されやすく、ハ．に属すると財産を狙われ、時には殺される。

注

- (1) 例えばE.Bonora, Anton Francesco Grazzini e il Lasca, Giovan Maria Cecchi e altri Commediografi minori, in 'Storia della letteratura italiana', Vol. IV, II Cinquecento, Milano, 1966ではこの時代における「真に最高の芸術家」と評価され、この作者に関して言語的な価値しか評価しないという批判的な態度を表明した Luigi Russo でさえ、その同じ論文 Novellistica e Dialoghistica nella Firenze del '500, in 'Belfagor', XVI, Firenze 1961,の冒頭で、この作者がこの時代には Bandello に次いで重要だとみとめている。
- (2) 本論で用いた主要なテキストは、Antonfrancesco Grazzini (il Lasca) , Le Cene, a cura di Riccardo Bruscagli, Roma 1976だが、Id., Le Cene, a cura di Enrico Emanuelli, Roma 1943, 及び'Opere di Anton Francesco Grazzini', a cura di Guido Davico Bonino, Torino 1977, 所収の Le Cene を必要に応じて参照した。作品の配列は、実は他の判の方が読み易いのだが、文献学的に今日残されている形に最も忠実だと思われる、主要テキストとして用いた Bruscagli 版に従った。しかしⅢ－？をⅢ－１０より先に読んだ方が、勿論原作のイメージに近い筈である。
- (3) Dizionario Critico Della Letteratura Italiana, Vol. II, Torino 1986所収の Bruno Maier の Grazzini

- の項目、Dictionary of Italian Literature, Connecticut 1979 のG. の項目を始め、前注の各テキストの Introduzioneや、B.Porcelli, Novellieri Italiani—dal Sacchetti al Basile, 1969 Ravenna 所収の Le commedie e le novelle del Lasca を主に参照した。なおこの作者の表現面での特質を知るためには G.B.Squarotti, Struttura e tecnica delle novelle del Grazzini, in 'G.S.L.I', CXXXVIII, Torino 1961 が有益だった。
- (4) Vincenzo Borghini (1515—80) は言語文献学者および歴史学者、ベネディクト派修道士で、近年その家族史研究及び家紋の研究書が刊行された、優れた実証的歴史及びイタリア語史の研究者だが、『デカメロン』の改作者の一人として、後世批判された。Benedetto Varchi (1503—65) は人文主義者で歴史家、フィレンツェ包囲中に脱出して各地を転々とするが、Cosimo の招きで反逆者から一転して宮廷人となり、1543年フィレンツェ学会に参加して長年 Petrarca や Dante を講義した。著書に『フィレンツェ史』他がある。Pier Francesco Giambullari (1495—1555) はギリシャ語、ラテン語のみならず、ヘブライ、カルディア等の言語にも通じていたと言われる言語学者で、ダンテ研究家としても名高いが、フィレンツェ語がエトルスク起源でさらにそのエトルスク語はヘブライ語に由来するという壮大な仮説を唱えた。
- (5) L.Salviati (1540—89) は名門の出身でサント・ステファノの騎士、雄弁で知られ30才未満で学会のコンソレとなった文学者、文法学者。喜劇も自作しているが、クルスカ学会創立の他、匿名で Torquato Tasso を攻撃したことで知られる。
- (6) G.Sercambi, II Novelliere, Tom. I, a cura di Luciano Rossi, Roma 1974.
- (7) M.Plaisance, La structure de la beffa dans les Cene d'Antonfrancesco Grazzini, p.80, in 'Formes Et Significations De La "Beffa" Dans La Litterature Italienne De La Renaissance'. Paris 1979.
- (8) 以下の記述は注(3) B.Maier, P.455.
- (9) また G.AlbertiはIl Lasca: Lettura e Digressioni, In 'Belfagor', II, Firenze 1947,においてG. がペトラルカを「宗教的に崇拜していたが」とも記している。
- (10) 注(3) のアメリカ人の記述は特にこうした活動を重視しているようである。なおアメリカから Robert J.Rodini, Antonfrancesco Grazzini: Poet, Drammatist, and Novelliere 1503—1584 (Madison, Wis.: University of Wisconsin Press, 1970) が刊行されている。
- (11) G.Gentile, Delle Commedie di Antonfrancesco Grazzini detto il Lasca, Pisa 1897.
- (12) 注(3) のPorcelli の論文 p.159参照。
- (13) 注(3) のD.O.I.L., P.264.
- (14) Porcelli, op. cit., pp.159—160. 具体的には登場人物がミサ通いや告解を怠らなくなった事だと言う。
- (15) Id., p.172.
- (16) G.Procacci, Storia degli Italiani, Vol. I, Cap. V.
- (17) Paolo Malanima, La decadenza di un' economia cittadina—L'industria di Firenze nei secoli XVI—XVII, Bologna 1982, p.294.
- (18) V.Branca, Boccaccio The Man and His Works, New York 1976, Chapter 3, The Mercantile Epic.
- (19) 拙稿、ジョヴァンニ・セルカンビの『イル・ノヴェッリエーレ (短編集)』について—地方都市の文学の運命—大阪外国語大学口承文芸研究会『世界口承文芸』第3号 (p.719)、大阪 1982、参照。
- (20) A.Grazzini, op. cit., a cura di R.Bruscagli, p.38, nota 4.
- (21) F.Sacchetti, Il Trecentonovelle, a cura di E.Faccioli, Torino 1970, pp.526—7.
- (22) 拙稿、マズッチオ・サレルニターノの『イル・ノヴェッリーノ』における貴族と民衆、大阪外国語大学口承文芸研究会『世界口承文芸研究』第2号 (pp.100—4)、大阪1981参照。
- (23) 注(7) 参照。

附 録

Antonfrancesco Grazzini detto il Lasca 『晩餐 (Le Cene)』の梗概

その枠組

1540-50年頃の一月の末の事、フィレンツェのある富裕で美しい未亡人の家に、その弟を含めて5人の高貴な若者が集まり、たまたま雪が降り始めたので中庭で雪合戦を始める。女主人は4人の若い既婚婦人(2人の養女、姪、近所の婦人)を呼び寄せ、召し使いたちと雪の玉を用意して男たちに二階から不意打ちをしかけた。女たちにやつつけられた男たちは一室で暖を取りながら復讐を思い立ち、雪を集めて女たちの部屋を襲うが途中で露見して失敗してしまう。ずぶ濡れで夕方まで帰れなくなった男たちが、合唱で気を紛らわしていると、女たちはそれらの歌声が気に入る、女主人が使いをして、男たちを同室に招いてマドリガーレを歌って楽しむ。その後一人が Boccacci (ママ) の『デカメロン』を交互に読もうと提案し、分担を決めている内に、女主人が晩餐の用意を命じ、雨(ママ)がひどく、カーニヴァルの木曜日(giovedì grasso)でもあるので晩餐に誘うとともにそれまで各自が自分の短い(piccolo)話を語り合うことと、さらに次の木曜とその次の木曜にも晩餐に誘い、それぞれ中位(mezzano)、長い(grande)話を語り合おうと提案したので、一同喜んで賛成する。女主人はその団体を共和制で治めたいと述べて、3個の袋(男たちの名札、女たちの名札、男女の順)を用意して話す順が決められる。こうして話が始まる。

『晩餐』I-1 (Poggio Br. XXIV, CXI, CXII) 語り手 Ghiacinto

フィレンツェにファエンツァ出身で maestro Mingo と呼ばれる名医がいたが、高齢のため往診を止める。その友人 Salvestro Bisdomini の妻が病気にかかり、他の医者から見放されたので、m.Mingo に相談すると、夜中に取った尿をもって来いと言われる。カゼンティーノ出身の22才の女中 Sandra に命じておいたが、Sandra は奥さんのしびんをひっくり返し、主人怖さにしびんに自分の尿を入れておく。医師は欲求不満以外何の異常も無いのに驚き、翌日も尿をもって来させるが、ばれるのを恐れた女中再度自分の尿を渡す。三度同じことを繰り返した後、医師は S.B. に夫人は病気ではないからと言ってセックスを薦める。S.B. は帰宅して、医師の処方に従おうとすると、夫人は殺す気かと驚くが、S.B. はあくまで医師の処方に従い、やがて夫人の病気は軽減し始める。その夜三度治療を行い、眠った後四度目の治療を終えたころには、全快する。女中はカーニヴァルの時主人夫妻に事実を語る。二人は女中に感謝し、欲求不満解消のため持参金を持たせて、サン マルティン ラ パルマ出身の自分の雇い人の若い養子に嫁がせた。

『晩餐』I-2 (Sercambi III, Poggio Br. CCLXX) 語り手 Amaranta

フィレンツェ商人の子 Amerigo Ubaldi は子供の頃、父がリヨンに行った為、11-17才の間厳しくて感じの悪い田舎者の家庭教師に躰けられ田舎者仲間とつき合わされる。その後父に代わってリヨンに行ったA. は10年間働き父の葬式のため帰国。まだあの家庭教師が家にいて第二人の教育に当たっているのを見て追い出す計画を立てる。ある晩友人と二人で家庭教師を連れ出し、Vaccherecciaの角の店で、そこの主人が気に食わぬからと戸のすきまから小便をしかけ、友人もこれにならう。次にすすめられた家庭教師が小便を始めると、中で待ち構えていたPilotoといういたずら者が乾燥したカマスで家庭教師の陰茎を挟む。P. がさかりのついたネコの啼き声をまねる。先生もネコをまねて宥めるが、P. はゆるめない。そこへ打ち合わせた通り、投石器を持った四人の男が現れて、石を浴びせかける。A. らは逃げ、残された先生はさんざん石をぶつつけられてあわてて逃げたはずみに陰茎をちぎり取られ、出費を惜しんで病院へ行ったため医師たちに笑われ、ひどい処置をうけて真鍮のパイプで小便をするはめになる。陰囊のみはどんな雄牛の帽子にでも使えるほど巨大になる。何日か無断で休んだ後A. の家に戻った家庭教師は破廉恥行為のためくびになり、世をはかなんで悔悛の衣をまとった隠者となる。

『晩餐』I-3 (Pecorone I-2, Doni Marmi, Cene I-8) 語り手 Florido

フィレンツェに Scheggia, Monaco, Pilucca らのいたずら者の仲間がいた頃、Neri Chiaramontesi という貴族の若者がその仲間に加わり、負けずにいたずらをする。ある日、騎士 messer Mario Tornaquinci の家で食事中に、N. が Scheggia に顔と手にインクを塗ってある唱婦を驚かすと1スクードやろうと提案。それにたいしてS. は、もしN. が甲冑姿で大鎌を持って Vacchereccia の角の感じの悪い小間物屋 Cecchirino の店に暴れこめば2スクード出すと逆に提案し、N. がこれを受ける。武装してゆっくりとしか歩けないN. に先回りして、Monaco は例の小間物屋、Pilucca はその近くのフェンシングの学校等で、N. が発狂して母親を殺しかけた後に、家財道具を井戸に投げ込んでこっちに向かってやって来ると触れ回る。N. が予定通り小間物屋で暴れていると、S. の注進を受けたN. の伯父でラーナ商人の Agnolo Chiaramontesi が、使っている羊毛打ち職人ら多数を連れてやって来て、皆で襲いかかり、はしごに縛り付けて家に連れて帰る。N. がいくら弁解しても狂人扱いされる。一晩暗い部屋で飲み食いせずに過ごしてやっとおとなしくなったN. は、翌朝医師たちを連れて来た伯父や母にS. が裏切った事を告げ、騎士 m.M.T. を証人に挙げる。伯父が訪ねると騎士は事実を認め、さらに前夜も晩餐の席で大笑いしたと言う。N. はS. に復讐しようと考えたが、Lorenzo dei Medici il Magnifico が面白がってS. を招いた事や、これまでの自分の行状を考慮した結果、こっそりとローマ、さらにはナポリへと去り、商船の書記からのちに船主となり、老いて忘れられるまで帰国しなかった。厭な奴を追ひ払ったS. は、騎士 m.M.T. にあずけておいた2スクードを取り戻して仲間と愉快に楽しんだ。

『晩餐』 I - 4 (Poggio Br. CIII. Decameron VII - 9) 語り手 Galatea

だれかが屁をこくと、「借金の無い奴の所へ飛んで行け」と皆が言う習慣がある。若い貴族たちが集まって会食する習わしの所へ Dionigio という若者が招かれ、二度目からは招かれもしないのに出席して、無知で高慢なために人に嫌われているのも気付かず、自慢ばかりしていた。彼の自慢のひとつは借金の無い事だったので、Gianetto della Torre は D. が髭をはやしていることをネタにして、一計を案じる。ある会食の席で G.d.T. が突然「臭い」と言い出し、皆がそれに同調して大騒ぎしたあげく、原因は D. の髭だとする。D. が怒ると、G.d.T. が前述の言葉を挙げる。皆に冷かされた D. は怒って立ち去り、二度と仲間に加わることは無かった。

『晩餐』 I - 5 (最後の部分のみ Medea) 語り手 Leandro

ジェノヴァ商人 Guglielmo Grimaldi は 22 才の若さでピサに来て、高利貸になり短期間で大儲けするが、情け容赦なしに稼いだために人々の恨みを買う。ある晩豪雨の中で何物かに襲われて胸を刺され、金銀細工師の Fazio の家に逃げ込んだ後にすぐ死ぬ。錬金術に熱中して財産を失っていた F. は G.G. の財布の中に鍵束を見つけ、その店に入って金庫からお金を盗み、自宅に穴を掘って G.G. の遺体を埋める。三日後 G.G. の失踪に気付いた人々は不思議に思うが、結局お金を持って逃亡したものと想像する。ジェノヴァとピサは敵対関係にあったため、G.G. の縁者は誰一人来ない。F. は妻の Pippa に銀を作る技術を発明してかなりの銀塊ができたので、フランスへ売りに行くと言うが、妻は全然信用しないので、F. はついに真相を打ち明けてしまう。F. はマルセユに着くと、G.G. のお金で大枚の小切手を二枚作製して帰国し大金持ちになる。早速家と土地とを購入して、知り合いの初老の女と 16 才のその娘を雇い入れる。F. はその小娘 Maddalena にほれて、妻の P. がうるさいので、M. 母娘と別荘に逃げる。嫉妬に狂った P. は夫を告発、その訴え通り G.G. の遺体が見つかったため、殺人犯として広場の衆人環視のなかで台に乗せられ八つ裂きにされる。皆は P. を責め、P. もやけを起こしてナイフで二人の子供の喉を刺して殺した後、自分も喉を刺して死んだ。人々は哀れんで夫と妻を一つの棺に収めて（罪人なので）城壁沿いに埋め、子供たちを S. Caterina 教会に埋葬した。

『晩餐』 I - 6 (Decameron VIII - 2, Poggio Br. LXIX, Sacchetti の断片) 語り手 Siringa

フィレンツェの領域部 Portico の司祭が、祭日に近所の司祭たちを招待すると、S. Felice a Ema 教会の ser Agostino 神父も来る。勤行の後で食事を済ませて散歩に出た s.A. は若い煉瓦積み工の妻 Mea に会って、M. から司祭は嫌いだと言われてかえって彼女が気に入り、村人に化けてガチョウを持って M. に会いに行く。M. はガチョウが気に入り買いたいと言う。s.A. はもしもやらしてくれれば無料で提供しようと言う。二人は M. の家に入って交わるが、一回目は女上位だったので駄目だと言う。今度は女が下になって交わると、s.A. は「今度であいこだから、もう一度下になってくれればガチョウをあげる」と言う。M. が怒って争っている所へ

M. の夫が戻る。M. が夫にガチョウの値段が20ソルドか30ソルドかで争っているのだと説明する。夫が気分良く30払ってやれと言ったため、s.A.は30ソルドもらって喜んで立ち去る。8—10日後s.A.が今度はガチョウの他に二羽の去勢鶏を提げてM. に会いにやって来る。女が愛想良く彼を迎えると、s.A.が弁解して仲直りしようと言う。やがてM. がかねての打ち合わせ通り合図すると、ノックの音がする。M. が兄弟が来たと言い、ボデスタの家来でこの世で最も残忍で乱暴な男だと言って、s.A.を寝室に隠す。兄弟はM. を叱り飛ばし、「間男はどこだ」と怒鳴り、寝室に向かって「ドアを開けろ」と叫ぶ。s.A.はあわてて窓から飛び下り、膝の骨を折り、命からがら逃げ去る。二人は大笑いしてガチョウと二羽の去勢鶏を手に入れた。s.A.は水車屋のラバに乗せてもらってやっとのことで帰宅出来たが、何週間も足が治らず苦しむ。s.A.は水車屋に口留めしたが、晩年に自ら白状した。

『晩餐』I—7（Sacchetti CC）語り手 Fileno

プラートの Pieve Principale（主要教区）でシエナ出身の司祭長 messer Mico di Siena とその甥の神父 Piero が、フィレンツェ出身の見習い修道士を雇っていた。P. が見習いに対していたずらのチャンスを狙う。最近毒きのこで死んだ少女の遺体があったので、P. はそれを鐘の綱に縛り付ける。夜明け前の鐘を突きにきた見習いが驚いて叫んで逃げ出した。P. はその姿を覗いた後ベッドに戻って寝る。見習いの若者は一度は仰天するが、月光をたよりに蠟燭を付けて死体を発見し、窓からそれをP. の寝室に運びこみベッドに入れておく。ぐっすり眠ったP. はベッドのなかで死体を見付けて、びっくり仰天、あわてて逃げ出しバルコニーから階段を踏み外して、腕、脇腹、頭を怪我して泣き叫ぶ。見習いはこっそりと死体を棺に戻し、鐘を打ちに行く。叔父の m.M. が事情を尋ねてもP. には答えることが出来ず、m.M. は医者を呼ぶ。医者診断では何事もなく、P. はついにすべてを語るが、見習いが全部を否定し、何もなかったと言い、事実死体が動いていないので誰もP. の言葉を信じない。甥は驚いて頭が変になり、窓から跳び降りて死ぬ。m.M. も落胆の余りシエナに帰国する。見習いもフィレンツェに戻り S. Piero Maggiore の聖職者となり、何度もこの体験を語った。

『晩餐』I—8（厳密な fonte なし）語り手 Lidia

Ippolito dei Medici がまだ若くて、法王 Clemente VII の名代 Cortona 枢機卿がフィレンツェを治めていた頃、あるロンバルディーア人の修道院長がローマ訪問の途中フィレンツェを訪れ、子供を連れて S. Lorenzo 教会の Michelangelo の彫刻を見に来た。同教会の長は、仕事に来ていた彫刻家 Tasso Battista（実在の人物1500—55）に案内を頼む。修道院長は「想像していたのと全然違う」と Michelangelo の彫刻にけちをつけ、有名な図書館へ行く途中、この教会はボローニャの自分の修道院には及ばぬと言う。T. が「もしあなたが彫刻や建築と同じ位神学にくわしければ、あなたはさぞ大学者でしょう」と皮肉っても、全然通じないばかりか、得意になって自

慢する。図書館に昇る階段でお供の修道士たちが先に図書館に入って二人きりになった時、修道院長がフィレンツェのドゥオモの円蓋を見て「ノルチャのそれの方がもっときれいで立派だといわれている」と言ったので、T. は修道院長を階段から引きずり落とし、「大変だ。修道院長が発狂して飛び降り自殺しかけた」と叫ぶ。T. の手下たちが駆けつけて、修道院長を縄で縛り一室に投げ込み鍵をかけてしまう。ようやく駆けつけた修道院長のお供の修道士たちに、T. は発狂して身投げしかけた修道院長を皆で縛って暗い部屋で休ませておいたと説明し、鍵を持って逃走する。ようやく助け出された修道院長はかんかん腹を立て、法王に言い付けるぞと、枢機卿に厳重に抗議した。各方面の抗議を受けて枢機卿は、八人委員会にT. を探させた。T. は友人 messer Amerigo da San Miniato のいる Medici 家の宮殿に逃げ込む。その晩枢機卿が Magnifico（何故か以下は Magnifico となっているが、時代が合わない。前記の Ippolito の称号か。それでも疑問の余地がある）と会食中、T. の事を報告して、T. を非難すると、M. は一方の意見だけでは決め難いと慎重論を説く。T. の友人 m.A. は早速 T. を呼ぶ。T. が現れて、修道院長はフィレンツェのドゥオモの円蓋よりも、ノルチャのそれのほうが立派だと考えているから狂っていると説明した。枢機卿も笑いM. の意向を悟ってT. を放免した。枢機卿からT. が綱の拷問にかけられ、2年間漕刑囚としてガレー船に送られたと聞かされた修道院長はすっかり満足してフィレンツェを出発した。

『晩餐』 I－9（Masuccio XIX）語り手 Silvano

語り手が Giovan Francesco del Bianco から聞いた実話。Brancazio Malespini は市の北方の郊外の煉瓦焼き工場主の妻と深い仲になり、恋人の夫が夜働くので、毎夕方 S.Niccolo 門を出て夜中に逢引きした後、夜明けの二時間前に渡し船でアルノ川を渡って、城壁に沿って進み、その時間でも通用門が開いている S.Croce 門を通して帰宅して眠る事にしていた。ある朝アルノ川沿いに歩いていた時、処刑場を見ると、何かが階段で動いているのに気付いて調べに行く。当時フィレンツェには Biliora という狂女がいたが、八月なので8－10個のカボチャを手に入れて、処刑台の下に運び刑吏や慰問役の真似をして、処刑台でカボチャを縛り首にしていた。女はB.M.が近付くを見ると、「待て、お前も縛り首にしてやる」と言って、カボチャもろともネコのように階段を駆け降りて来る。男はびっくり仰天して、悪魔の仕業だと脅えて気を失った。女は彼を縛り首にしようとその首にエプロンを巻いて引きずるが、気が変わってカボチャの処刑に戻った後立ち去る。夜が明けて、町へ働きに行く職人らが彼を見付けて、人だかりができ、父親も到着し、B.M.の身体は Tempio の教会に運ばれ裸にされる。医者が彼が生きている事に気付き、酢や葡萄酒で手当すると意識を回復した。本人も何が起こったのか分からない。何週間も世話してようやく回復したものの、恐怖で体毛が一本もなくなる。その翌晩も狂女がカボチャを縛り首にしているのを見て、人々は何が起きたのかを知った。

『晩餐』I-10 (Sercambi CLIV, Masuccio III. Francesco Vettori, Antonio Barzizzi の喜劇 Canterara ecc.) 語り手 Cintia

公証人の ser Anastagio dalla Pieve は、高齢で若い妻 Fiammetta を娶る。彼女は近所のパリ帰りの35才の医師 maestro Giulio を見かけて笑いかけ、会釈をかわしている内にやがて愛し合うが、昼は老女中夜は夫が見張っているため思いが遂げられない。ある晩寝かけた頃、妻はおなかの痛い騒ぎ出し、身体が破裂しそうだと言き叫んで医師を呼ばせた。m.G.は夫に遠い薬屋に薬を買いに行かせ、女中たちには家の中で一番高い所と低い所へ行かせてロザリオを持って祈らせておいて、二人で楽しむ。三度交わった頃夫が帰宅。妻は眠ったふりをしており、医師から何とか命を取り留めたと聞いて、こんな治療にお金は取れないと遠慮する医師に無理に1フィオリノ受け取らせる。翌朝夫は用事であわてて外出しようとして、階段から足を踏み外し転げ落ちて血まみれになる。医師たちが呼ばれるが重傷と分かり妻がおおいに悲しんで泣き叫ぶと、夫は気を良くして、妻を励まし全財産を妻に残すから、再婚して生まれた最初の子供に Anastagio と名付けてほしいと頼んだ。妻は快く聞き入れ、間もなく夫が死ぬと大金持ちになり、m.G.先生と再婚して、最初に生まれた子供に Anastagio と名付けたという。

一同は大笑いして賢い二人を誉め、かくして話者は一巡したので、晩餐を楽しんだ後、次の木曜にも集まることを約束して解散した。

『晩餐』II-序

次週の木曜日、人々は所定の場所に集まって来る。Amaranta は大きな火をつけさせて、上席に座り、以下 Florido, Galatea らが秩序通りに着席する。Amaranta は荘重で女神のようなバロコ式の美人で、「今晚の話しは前のよりも長くなければならないから、晩餐が遅くならないようすぐ始めましょう」と自分から話し始めた。

『晩餐』II-1 (Menaechmi plautini, TrissinoのSimillimi, FirenzuolaのLucidi, AmbraのBernardi, GiraldiのAntivalomeni ecc.)

フィレンツェによるピサ征服(1406年)以前のピサの事、パリ帰りのミラノの医師 maestro Basilio が来て、金を儲けて貴族の孤児を妻に娶り3人の男子を得た。次男 Lazzero は憂鬱質で強情で根暗な性質のために、父に嫌われて田舎で育てられる。10年後ピサで流行病(一種の眠り病)が流行して一家が死に絶え、L. が全財産を相続するが、独身のままで人との交際を避けている。たまたま漁師で鳥撃ちの Gabriello と知り合いになり、L. は自分に酷似している G. が気に入る。L. は G. についてアルノ河口の水門の外へ魚取りに出掛けるが、G. の真似をして水に潜ると、水流に流されて溺れ死んでしまう。G. は驚くが、本当の事が言えず、L.

と衣服を交換してL. に成り済ますと、死体を水底の柱に綱で巻きつけた後に人々の助けを求めた。皆は死体をG. だと信じて葬式をする。G. はL. に成り済ましたままで、G. の死に責任があるので残された妻子の面倒を見ようと約束し、2000フィオーリーノ金貨と500モネータを贈る。G. は人付き合いの悪かったL. の真似をして人とあまり話さないが、召し使いらは主人が変わったと思い、その変化を喜ぶ。G. は妻 Santa の嘆きぶりに心配して、子供らとS. の寝室に入り、以前いつも使っていた言葉を使った為、S. は驚く。G. は子供らを室外にやって妻に真相を語って交わり、さらに扮装を続ける必要があることを教える。G. は神父 frate Angelico にL. の死に責任を感じていることを訴え、未亡人のS. と結婚したいと申し出た。神父はその申し出が気に入って激励し、G. は神父に30リラ贈って元の妻と結婚した。また以前から居た下男、女中らにも贈り物を与え、召し使いの数も増やして楽をさせて満足させた。その子孫は今日も繁栄して居ると言う。

『晩餐』II-2 (Decameron III-8, Sercambi II, Poggio Br. 360, Morlini II ecc.) 語り手 Florido

まず1527年のペストが、1348年のピアンキのペスト (Grazzini は1399年の白衣の巡礼運動の年に発生したペストを、Boccaccio が記録した1348年のものと混同している) と比較される。その48年のペストが終わって市民が市内に戻った頃、Camaldoli 地区の毛織職人が結婚して、Mariotto という男子を得た。M. は馬鹿なので人々は彼を Falananna と呼ぶ。18才で両親を失う。人々はF. (=M) を貧しい Mona Antonia の娘 Mante と結婚させる。Mante には Berna という恋人がいる。B. はM. の母親 M.A. の手引きでF. がM. 母子と眠っているベッドに忍び込み、M. と交わるが、M. が声を出した為、F. は目を覚ます。母親 M.A. が「この子は病気で死にかかっています」とごまかす。M. が「死ぬ。死ぬ」と言ったので、F. は慌てて「告解師を呼びに行く」と起き上がり、ベッドから転げ落ちた。M. は闇の中で、「もう治りました」と言って安心させる。F. は Santo Spirito 教会の四旬節の説教で死に憧れ始め、妻の母子と相談。二人は彼にいろいろな死に方を教えるが、F. の気に入らないので恋人のB. と相談し、とりあえずこの機会に殺してしまうことに決めて、F. には Ogni Santi 教会の Fra Bartolo の協力が得られるだろうと言って喜ばせる。F. は大喜びで公証人を呼ばせて遺言を作製し、遺産を妻に与えることにした。M. は夫を床に就かせ。夫が重病だと泣き叫ぶ。人々が集まると、F. 自らもう死ぬと言う。Berna が修道士に成り済まして現れ告解を行う。B. はF. に声をたてると地獄行きだと脅かして沈黙を約束させるが、F. は腹がへったと言って妻に食物を持って来させる。食事が済むとB. は、「汝は死んだ」と宣言し、M. がわっと泣き出してF. の身体を洗い、シーツをかけてF. の顔を隠す。F. が屁をこいたのであたりは臭くなり、墓堀り人が「臭い」といいながら戸板に載せて運ぶ。葬列の途中ある友人が「F. めはおれの3リラを取って行きやがった。泥棒め」というと、F. は怒ってがばと起き上がり、「そんなことはおれが死

ぬ前か、家内にいえ」と叫んだ為、人々は戸板をほぼり出して逃げ出す。F. は慌てて「おれは死んでいるぞ。埋めてくれ」と大声で叫ぶ。戻って来た人々は蠟燭立ててF. をばかばか殴り、F. はたまらず逃げ出し、人々が追っかける。カルライア橋で道一杯の物を積んだ車を避け損ねたF. はアルノ川に転落した。たまたまフランドルの花火師が、市の軍事委員らの役員の前で水に触れると燃え出す油の実験中で、トリニタ橋から流した油が水面で燃えている所に転落したため、F. は大声で喚きながら、焼いた梨のようになって死んでしまう。M. の母子らは心配するが、B. がF. の死を確かめて来たので一安心する。人々は魔法のせいだと考える。M. はめでたくB. と結婚し、かくして「アルノ川に落ちて焼ける」という諺が生まれたという。

『晩餐』II-3 (ms. Magl. VI 190, Nov. Magl., 2 I n.) 話し手 Galateo

金持ちの未亡人 Donna Laldomine degli Uberti は高額の持参金付きの娘 Lisabetta を金持ちの貴族に嫁がせようとするが、L. は貧乏貴族の青年 Alessandro に惚れてしまう。L. が手紙を送り、A. が返事を書く。L. はA. が十分賢明だと判断してやるべきことを指示する。A. はその指示にしたがって、夜中に梯子を持ってL. の家に行き、テラスに上ってL. と逢引きして指輪を与えた。母親は娘を messer Geri Spina の息子 Bindo に嫁がせることに決めて娘に告げると、娘はA. と婚約したことを語った為に、母親は激怒して娘を尼僧院に押し込め、m.G.S.に法王に手紙を書いて婚約を無効にしてもらうよう頼む。娘が尼僧院長に Bindo Spina と結婚しても良いと申し出た為に、母親は喜んで娘を連れ戻す。翌朝娘は母親に怖い夢を見たと言え、母親はサンタ・クロッチェ教会の信心深い単純な修道士 fra Zaccaria を招いて相談すると、f.Z.は夢は当たることがあると言い、娘に語らせた。娘はアルノ川岸で鳩と鳥が白と黒の馬車を引いて円い大きな玉を円い部屋に運ぶのを見たと言始め、高い椅子の上に眩しく輝く若者を見たことや、花咲く美しい野原で二つの泉に居た隠者が、右手で東の白い水の泉に小石を投げると白い子供が現れて天に飛び立ち、左手で西の黒い水の泉に小石を投げると炎の子供が現れて地中に沈むのをみたと言し、さらにその隠者はL. に「汝が Alessandro Torelli と結婚すれば、神様がお喜びになる」と告げたことを話した。f.Z.は娘にこんなことを思い付ける筈がないと考えて、L. をA. と結婚させるよう母親を説得する。母親がm.G.S.との約束を語ると、f.Z.は自分が話しを付けてやろうと言って仲立ちを勤めて Spina 家との話を破談にする。喜んだL. は貧しい娘が結婚するのに役立つようにと、f.Z.に300リラの Peruzzi 銀行の証券を寄進した。A. はL. と晴れて結ばれた後立派な市民となり、妻の財産を益々増やし、人々から尊敬されて、共和国のために役立ったため、母親も満足した。

『晩餐』II-4 (Masuccio XX, 登場人物はI-3、II-6と共通) 語り手 Leandro

悪戯者の金銀細工師 Scheggia と彫刻家 Pilucca らが Giansimone という帽子屋と知り合う。G. は近所の金持ちの貴族に未亡人に惚れているが貞淑で手が出せず Scheggia に相談する。

S. は P. を仲間に入れて G. に御馳走になり、25ドゥカート出して魔術師 Zoroastro に頼めば女をベッドに呼び寄せることができると保証する。次の日曜に P. が G. に魔術師 Z. を紹介し、Z. がすでに魔法の準備を始めていると言って一同を自室に案内、竜の血で部屋の中に円を描くと、G. は怖くなる。Z. が魔法の証拠を見せてやろうと言って、千里眼で仲買人 Monaco が町のなかを歩いている様子を語り、まもなくやって来ると予言。打ち合わせしておいた通り M. が現れたために G. は恐怖のため脱糞してしまう。S. が脅えた G. を家まで送ると、G. の妻が驚いて G. の身体を洗う。翌朝 S. と P. とが G. を訪ねると、G. が弱っていて起き上がれないので、名医に血を抜いてもらって回復させるが、もはや G. は未亡人の事を諦めている。S. が魔術師を怒らせると大変だと脅かすと、G. は八人委員会に言い付けると聞き直る。S. は八人委員会などは悪魔に無力だから、むしろ悪魔に贈り物をすべきだと忠告して去り、仲間にすべてを話す。P. はなんとかして25ドゥカートを騙し取ろうと考えて仲間の同意を得、一人の職人に警吏の姿で「三時間以内に司教の書記局に出頭すべし」という文書を G. の所に持って行かせた。G. が驚いている所へ S. が訪れ彼も呼び出しを受けていると嘆き、「我々は立派な婦人に魔法をかけようとしたのだから、焼き殺される」と脅かし、25フィオリノ（ママ）出せば何とかなのと言う。G. は真に受けてお金を出そうと約束した。G. は結局22フィオリノしか準備できなかったが、S. は残りを自分が用意してやると言ってお金をまき上げ、幸い書記がまだ記録を作製していなかったのも、Z. が四体の臘人形を作って魔法をかけてやいたら関係者全員が事件を忘れてしまったと説明して、G. を安心させ、奪った金で仲間一同は御馳走を食べた。

『晚餐』II-5（第2日目で唯一の悲劇なので本作品のI-5と対応、神話 Fedra, Leonardo Bruniの Antioche e Stratonice, また Decamerone の II-8 と似た状況2箇所）語り手 Siringa

古代フィエゾレに Currado という領主がいて、彼には16才の Sergio という男子があったが、ローマ市民 Lucio Attilio の娘 Tiberia と再婚したものの高齢のためあまり相手にできない。S. は義母 T. を恋して病気になるが、T. が食事を運ぶと食欲が回復して治る。父は喜んだが、心配していた乳母が S. の恋に気付く。乳母のすすめで T. が C. の許しを得てメルクリオの祭の夜に宴会を催し、市内の美女を招き S. も出席、その夜から T. も義理の子 S. を恋し始める。父が狩りに行った日に S. が T. にお礼を言いに行くと、T. は「何故私を救って下さらないの」の迫って S. に恋を打ち明ける。S. も病気の理由を打ち明けて二人は愛し始め、S. が T. の部屋に忍び込むようになる。ある夜 S. が忍び込んだ後に、習慣に反して、C. が T. の寝室を訪問したので、T. が「誰」とたずねてゆっくりと夫を室内に入れている間に、S. は窓から逃げ出す。C. はふと S. が忘れて行った小さな帽子に気づき、何食わぬ顔で妻の胸を触ると、心臓がはげしく鼓動していたので妻の不倫を悟る。C. が去った後に T. は帽子に気付いて心配するが、翌日も C. の態度に何の変化もないので、ほっとして S. に帽子を返す。S. はその翌晩は T. を訪ねなかったが、その次の晩 T. の部屋に忍び込んだ所を C. が見付け、警備隊長を呼

びその部下の警吏たちと共に妻の寝室を襲って二人を捕えて縛る。C. が息子の目をくりぬかせ、舌を切らせ、手足を切断させると、T. は失神してしまう。C. はT. をも同じ目に合わせる。二人は同じベッドの上で身を寄せ合って死を待つ。乳母も家来もこれを見て皆泣く。フィエーゾレの市民はこれを聞いて憤慨し、貴族も民衆もC. を殺せと叫んで駆け付けた。C. は穀倉に逃れたが、人々は彼を捕えて石打ちの刑に処した。C. が石に埋まると、人々は二人の恋人を丁重に葬り、フィエーゾレはその後ローマに征服される日まで共和制を保った。

『晩餐』II-6 (悪戯仲間は Le Cene, I-3, II-4 と同じ。Decameron のVIII-3 とIX-3 の Bruno と Buffalmacco の悪戯話と同系統) 語り手 Fileno

フィレンツェに Gasparri del Calandra という金銀細工師がいたが、妻が兄弟の遺産を得たため金持ちになる。Scheggia, Pilucca, Monaco, Zoroastro らの仲間とよく飲食して彼らに煽られて、酒の通だと自任し、魔法の話に内心脅えながら平気のふりをしていた。親戚の一人が彼の悪友との付き合いがフィレンツェ中の物笑いの種になっていると忠告したため、G. は一度は田舎の別荘へ出掛けたが、退屈の余りフィレンツェに戻った所をP. に見つかりうっかり親戚の忠告をもらしてしまう。P. はG. に遊びに来るよう強く薦めた後、仲間とG. からお金を巻き上げようと相談して、G. の隣りにすむ高級絹織物の織物師の Meino を仲間に加えて計画を練った。G. が例のごとくP. の家でS. やZ. らと御馳走を飲食した晩、P. やZ. が幽霊、悪魔、魔法等の話でG. をたっぷり脅かしておき、怖くなったZ. が帰りに誰かついて来てくれと頼んでも、誰もついて行かない。まっ暗な九月の夜、こわごわ一人で帰宅するG. を、先回りしたZ. やS. らがカルライア橋の上で、槍の先に怖い面を付けて衣を着せたお化けで脅かすと、G. はびっくりしてP. の家に逃げ戻った。一同が出掛けると何もなかったので、G. の飲み過ぎのせいにされる。

その間にM. とその仲間がG. 宅にベランダから入りこんで、G. の寝室に白い十字架や骸骨を描いた黒い布を張り巡らせ、その中に死人に化けた白衣の人を寝かせ、十字架や花を飾り、煌々と二本の蠟燭を灯しておく。帰宅して扉を開けたG. はそれを見てびっくり仰天転びながらほうほうの態でP. の家に逃げ戻り、その間にM. らは全てを片付けてしまう。G. が一同に「助けてくれ。わが家は死人や霊で一杯だ」と訴えても誰も信用しない。G. が片目を賭けると言うと、Z. が目をくりぬいても何にもならないから「お前のはめているそのルビーの指輪を賭けろ」と言い、一同で出掛けると何一つ残っていないので、指輪を巻き上げる。後で25ドゥカートで買い戻させてその金で大いに飲食を楽しんだ。Z. はその晩は怖くてS. の家に泊めてもらい、その後 Borgo Stella の家も売ってしまって、San Piero Maggiore に新しい家を買う。S. らはこの家にも悪戯を仕掛けたが、G. は親戚の忠告で真相を悟ってS. らと手を切った。

『晚餐』II-7 (Le Cene I-2, II-8, IL Lasca Madrigale IV, X, また Decameron VIII-4 ecc. に少し似ている。) 語り手 Lidia

フィレンツェの名士 Tommaso Alberghi の家に、Taddeo という Valdarno の小村出身の貧しい家庭教師がいたが、身の程も弁えず近所の貴族の娘 Fiammetta を恋して、恋文をその家の女中を介して贈るが、女中が恋文を F. の兄弟で T. を憎んでいた Agolante に渡してしまう。A. は怒って T. を殺そうと考えて友人 Lamberto に相談すると、L. が止めて、その代わり悪戯を仕掛けることにして、L. が適当に返事を書くと、喜んだ T. がまた恋文を贈る。L. は女の名で兄弟 A. が間もなく市外に出掛けると伝えた。先生は大いに喜び F. を称える詩を贈る。やがて A. は T. の見ている前で別荘へ出掛ける振りをして、L. が女の名で手紙を書き、その夕方四時に三度手を叩けば扉を開けてやろうと約束。T. が夕方 F. 宅で合図すると女中が扉を開けて、一階の部屋で T. の服を脱がせ、「今度開けるのが F. 様よ」と言って、外から錠をして閉じ込めたまま待たせておく。その間に A. がこっそりと帰宅して L. らと四人の仲間とゆっくり食事を済ます。余り遅いので疑い始めた T. が鍵の回る音を聞いてやれ嬉しやと喜んだのも束の間、四人の男が乱入して黙って T. をベッドカバーでくるむなり、滅多矢鱈に鞭で叩きまくり、大声で泣きわめく T. を血まみれにしてしまう。Piloto と Tribolo という悪戯者が Taddeo そっくりの人形を作り、先生の服を着せて首に「男色者」という紙を貼って、Mercato Vecchio の柱に縛り付けた後、裸にした先生を、四人の仲間の内の一人の馬小屋に手足を縛ったまま放置しておく。翌朝人々は人形を発見して大騒ぎになる。Tommaso Alberghi も人形を見る。A. や L. や P. の仲間は観衆に混じって無茶を言って T. 先生を誹謗する。八人委員会が調査を開始し、馬小屋にいる T. を発見するが、危うく松明で焼きそうになる。手足を解かれた T. は、裸のまま折りしも降り出した大雨の中に逃げ出し、広場で狂人だと思って見ている人々の前で10回転ぶ。市の門から駆け出してその後行方不明になる。八人委員会には A. や L. の親戚がいたので、四通の手紙が証拠となって四人はお叱りを受けただけで無罪放免となり、悪戯の話をして楽しんだ。

『晚餐』II-8 (Le Cene II-7, Firenzuola I-4) 語り手 Silvano

フィレンツェに由緒ある、名前は記さない方が無難な貴族の二人兄弟がいたが、貧乏なために市に近い農園に住んでラーナ組合に加入していた。一人の神父が彼らの妹に惚れて老女中を買収し、恋文を贈ると、女も気晴らしに返事を書くが、喜んだ神父がしつこく大袈裟に言い寄るので、うるさくなった妹は兄弟達に訴えた。兄弟は怒って神父を懲らしめようと計画し、妹の名前で、四日後兄達がプラートへ出発するので、夜の二時以後待っていると連絡する。九月八日のマリア誕生祭の前夜、兄弟は妹を親戚の未亡人の家に預けて、一度は家を出る振りをした兄弟が、一人の親友と共にこっそり帰宅して神父を待ち伏せる。神父は見習い聖職者をフィレンツェの親しい神父の家に行かせた後、女の屋敷に忍び込む。兄弟の弟の方はまだ髭も生えずハンカチを首に巻

いて薄明かりの中にいると、神父は女だと信じて抱こうとして突き飛ばされてしまう。神父が「どうしたのか」と嘆くと、残りの二人も現れる。許しを乞う神父を兄が罵倒し、弟が剣で脅かして裸にし、紐で縛り財布その他身ぐるみ剥いでしまう。さらに神父の教会へ行き、神父の鍵を奪い、彼の金庫の中にあった金貨200フィオリノ、8-10個の小銭の包みを始め、リンネル、毛織物等値打物を一切合財奪った揚げ句、家財道具や食器類を全て叩き壊し、酢、油、小麦粉等を地面にぶち撒けた上に、裸の神父を教会のそばの緑の幹に背を向けて、両腕を上挙げ、地上から指2本分の高さで、下半身は自由にしたまま縛り付けて立ち去った。神父は夜中に寒さで歯をガチガチ鳴らす。村人達は祭日の朝の Ave・Maria の鐘が鳴らないので不審に思い教会にやって来て、神父の叫び声で、縛られている神父を発見して救い出す。服を着た神父は村人達に、自分が祈っていると三人の悪魔がやって来てこんな目に合わせたが、自分は神様に感謝していると語る。どんな聖人も自分のような目にあった験しはないが、悪魔が自分の家をめちゃめちゃにして、200ドゥカート（ママ）盗んで行ったのは、自分がそのお金で祭壇に Maria 昇天図を飾ろうと考えていたためだと説明して村人達を感動させる。村人達は争って寄進し、彼を聖人扱いしたので、二年も経たない内に損害を全て取り戻した。妹とプラートから戻った兄弟は神父の嘘に感心し、200フィオリノの持参金で妹を金持ちの商人に嫁がせ、残りの金で御馳走を楽しんだ。神父は兄弟にいつも愛想良く挨拶した。兄と女中が死んだ後弟が真相を語るが、誰一人信用せず、人々は弟を嘘つき扱いし、かくして神父は恥じをかかずに済んだという。

『晚餐』II-9（二つの話に分裂していても出典は不確か）語り手 Cintia

ミラノに Neri Filipetri と Giorgio di messer Giorgio というふたりの親友がいたが、G. が 4-6 ヶ月間ローマへ行く事になり、G. から彼の恋人で未亡人の Oretta あての手紙の連絡係を N. が引き受ける。N. は度々 O. と会う内に気に入ったこの未亡人を口説く。未亡人が N. を叱ったので、N. は慌てて謝り、G. には言ってくれるかと頼むと、未亡人は了解する。ある晩 G. が不意に帰国して、食事の席で未亡人の様子をたずねる。N. は未亡人の口から自分の行為が G. の耳に入る事を恐れて、自分が G. のためにわざと未亡人を口説いてその心を試したところ、彼女に叱られたと語る。G. は不快になるが我慢しておく。翌日 G. が未亡人 O. と再会した際に、O. が N. のことを話さないのを、不快になるが何も言わずに我慢しておく。その代わり N. への仕返しに、N. の恋人 Francesca の父で薬屋の Martinozzo に、彼の娘が N. と交際している事をばらす。M. は息子で公証人の ser Michele に相談し、怒った s.M. が N. を捕まえて、父と子で N. を叱り、娘と結婚せよと命令する。N. が同意したため、M. 父子は F. を持参金なしで嫁に出せると喜ぶし、F. 自身も満足した。M. がその事を妻の兄弟 Bartolo に話すと、B. は N. には病床に就いたままの妻と二人の子供がいると告げる。M. が N. に大司教に訴えると脅かすと、N. は自分は F. に暴力は使っていないし、珍しいことでもないと言い直り、自分は F. の持参金の為に 500 ドゥカート払って秘密を守るから、F. を嫁にやれと薦めた。

M. は早速F. の結婚相手を探し、持参金800フィオリノで話を決めるが、F. はN. を恨む。おまけにN. は約束の金を払わず、結局人が怪しむから自分は払うのを止めると言ったので、M. は財産を売って持参金を用意し泣寝入りする。N. はG. に恋人を失ったことをぼやき、他人にも名前や場所を多少変えながらではあるが、情事を大いに吹聴した。

『晩餐』II-10 (Firenzuola, Novello del periodo pratese I) 語り手 Chiacinto

フィレンツェのギベッリーナ通りの Chiaramontesi 家未亡人 monna Margherita は、成人した適当な時期に持参金150小リラで嫁入りさせる約束で、ムジェッロ出身の娘 Pippa を女中に雇う。やがてP. の母親 Mona Mea と Beco dal Poggioの間で婚約がまとまる。結婚式の朝花婿のB. がムジェッロ随一のDicomanoの市へ突然行きたくなって出発したため、M.M.とP. の母娘だけで教会へ行く。神父は折角来たのだからと言って、そこにいた青年 Nencio を代役にして結婚式を済ませたので、同じ三人でフィレンツェの女主人の所へ持参金を受け取りに行く。母親は面倒なので、N. をP. の花婿として紹介した。女主人は使いを銀行にやるが、その日は閉店で、三人は女主人の家に泊まる。女主人は盛大な御馳走をもてなして、新婚のベッドを用意する。P. が服を着たまま寝ようとするのをN. がうまく誘惑し、P. も満足して二度交わり、翌朝女主人は卵を二個ずつ与えた。その日無事に持参金を受け取ってムジェッロへ帰る。聖ジョヴァンニの祭日にP. の夫B. が2羽の鷺鳥を提げてフィレンツェに来たが、目当ての兄弟がいなかったため、妻の元女主人に礼を言い立ち寄る。ところが女主人が「あんたはP. の夫じゃない」と言い張った為に、B. は妻がN. と泊まったことを悟り、義母の家へ行って抗議する。さらにフィレンツェへ行って会う人毎にぼやき、司教に訴えた。N. やP. も呼び出されて ser Agostino が調停に当たる。s.A. はN. から全てを聞き、B. を叱り、N. は万事を善意からやった上に、P. とは関係していないと保証する。しかもB. の気が済むよう、N. が結婚する際には、結婚式の晩にその結婚相手がB. と一夜を共にすることを約束させた。そのためN. はB. が生きている間は結婚しなかったと言う。(第三日のIII-?は後出、他の部分が欠如しているので、直ちにIII-10に続く。)

『晩餐』III-10 (Decameron III-8, Porretane XLI) 語り手 Amaranta

Lorenzo il Magnifico の時代のフィレンツェに、アレツォ出身の愉快で物馴れているが横柄で傲慢な医師 maestro Manente がいて、しばしばL. の宴会に参加しては悩まされていた。ある時m.M. が居酒屋で泥酔してベンチで眠っているのを知ったL. は、二人の信用できる家来にこっそりとm.M.を自分の屋敷に運び込ませ、その衣類を剥ぎ取り、物真似の上手な道化師 Monaco に与えてm.M.に変装させる。道化師はm.M.の財布から奪った鍵で医師の家に入り、翌朝遅くに隣の女に窓から声をかけて、喉が腫れたから気分が悪いと言って卵二個と火を分けて貰い、病気で倒れたふりをしたので、女はそのころ人々が心配していたベストに罹ったものと信

じこむ。噂を聞いた m.M. の妻の兄弟の金銀細工師 Niccolao が様子を見に来るが、道化師は閉じこもって返事しない。そこへ大勢の貴族を連れた L. が現れ N. から事情を聞き、N. を病院に手配しに行かせた後、気の利いた召し使いになすべきことを指示すると、召し使いは鍛冶屋に扉を開けさせて中に入り、道化師と連絡し、その報告で L. は m.M. の家の回りに布を張り巡らせて立ち入り禁止にする。その中で召し使いと道化師は、金銀細工師が用意して来た御馳走やワインをたらふく楽しんだ。一方裸で監禁されていた m.M. は、目が覚めると居酒屋以後のことは何も覚えていない。腹が減り始めたところへ、L. の二人の召し使いが白い修道士の服を来て、仮面を冠り、一人は剣と松明、もう一人は葡萄酒と御馳走を持って入って来る。m.M. はその姿に脅えたが、ふたりは彼に部屋着を着せるとすぐ立ち去る。その翌日 L. は外国人の仲買人 Franciosino が落馬して死に、Santa Maria Novella 教会の墓地に埋葬されていることを知り、二人の家来に首の骨が折れた遺体を掘り出させて、道化師のいる m.M. の家にこっそり運び込ませる。その後帽子などで顔を隠して m.M. がこの世を去ったと公表し、やって来た金銀細工師らと共に丁重に弔う。金銀細工師は姉妹に彼女の夫が死んだので、フィレンツェに来て遺産の管理をしながら一人息子を育てよと連絡した。道化師 M. は家に戻り、後で L. と悪戯を笑い合った。他方 m.M. が 4 - 6 日間ほぼ同じ生活をした後、L. の指示を受けた二人の仮面姿の家来は、夜明けの四時間前頃 m.M. に上下共赤いウール地の服を着せ手錠をはめ、頭からすっぽり部屋着を被せ、怖くて震えている彼を屋敷から外へ連れ出して、二頭のラバの背に載せた駕籠に押し込め、市外へ運び出す。その日の夜半に人里離れた Camaldoli 修道院に到着した。二人は以前のままの姿で、駕籠から m.M. を出してやり、御馳走を与えた、翌朝修道士に m.M. の世話を頼んで立ち去る。その後 L. は重大な公務で市外に旅し、かなりの月にわたって帰国せず、帰国してからも m.M. のことを忘れていたが、ある時 Camaldoli 修道士を見て思い出し、修道院長に適当な処置を手配させる。その間に m.M. の妻 Brigida は未亡人になったと信じて兄弟の金銀細工師 N. の友人でやはり金銀細工師の Michelangelo と再婚して妊娠してしまう。N. は m.M. の子供の後見人となって、Brigida 夫婦と共に m.M. の遺産を利用する。修道院長は L. の指示通り仮面を着けた人々に m.M. の世話をさせ、聖歌の聞こえる部屋で夜昼なしに明かりを灯し、寒くなったので暖炉をつけ、厚着をさせていたが、L. の手紙を受けて、その指示に従い、m.M. に例の上下共に赤い水夫風の服を着せて、手錠をはめあごまで頭巾を被らせて連れ出し、S. Francesco が聖痕をうけた La Vernia の岩に近い樅の木に蔓草で縛り付けて（頭巾や手錠は外し）逃げ戻った。一人残された m.M. は蔓草を振り切って少し行くと往来の激しい道に出て、ラバを連れた運搬人から居場所を教えられ、巡礼者の病気の治療等しながらフィレンツェに向かい、Mugello の自分の農園に着くと、持主が変わっていて驚くが、知り合いの農夫親子に無理に泊めてもらい、その息子に妻 Brigida 宛ての手紙を届けてもらおうと、B. とその夫 M. は驚き、M. が脅かしの返事を書いたために、m.M. は自分がすでに死んで埋葬されていて、妻が再婚していることを悟る。事実彼がフィレンツェへ行っても、妻もその兄弟の N. も以前から

知り合いの妻の再婚相手も友人達も知人も誰一人として m.M. を本物だと認めない。だがようやく滑稽詩人 Burchiello ただ一人が疑問を抱き、友人 Amadore, Biondo と m.M. を自宅に招いて一緒に食事を取り、デザートの際に m.M. が以前の習慣通り葡萄と梨ばかり食べて評判の raviggiuli チーズに手を出さないのを見て m.M. が本物だと見抜く。m.M. は大感激して B. と抱き合い他の友人も m.M. を信じた。滑稽詩人は、全てが Careggi の Medici 家の別荘で m.M. が失礼なことをしたのに対する、Lorenzo il Magnifico の報復だと推理する。B. は m.M. に頭を剃らせ、背中で切れた服を着せて人々の集まる所を巡回して m.M. の窮状を訴える。M. と Br. 夫婦と N. の側でも m.M. の埋葬証明書を用意して備える。やがて双方は代官に訴え、八人委員会が関係者を召喚して事情を聴取、Lorenzo はその報告書を読んで笑い転げた。ようやく m.M. は昼食中の L. にお目通りがかない、惚けて不思議がる L. に m.M. はひざまづいて接吻して、その夕方 L. に双方の言い分を判定してもらうことが可能になった。その後代官が関係者と市内の聖職者達を一堂に集めて取り調べに着手し、m.M. が Valombrosa の修道士の言葉にやりとしたため張り飛ばされる一幕の後に、L. に呼ばれてフィレンツェに来ていた魔術師 Nepo がすべては m.M. の父に侮辱された復讐のために自分がやったのだと偽って告白し、その証拠を見せようと Santa Maria Maggiore の m.M. の墓に皆を連れて行き墓を開いて前日入れておいた真っ黒な鳩を飛び出させ、一同が驚いている間に姿をくらます。そこで一件落着となり、L. が判定を下して、まず二人の夫を持つ Brigida は着のみ着のままで兄の家へ行って子供を生むこと、生まれた子は父親の Michelangelo が引き取ること、その後 Brigida はもとの夫の家に戻り以前どおり夫と子供と共に暮らすことを命じた。代官は魔術師 N. の処刑を考えたが、L. がとても無理だと止めたので手が出せず、N. の名声はますます高まった。尚 Brigida が生み Michelangelo が十才まで育てた子供は、父の死後 Santa Maria Novella の修道院に入り愉快的説教をするドメニコ派の修道士 Succhiello として市民に愛されたと言う。

いとも美しい Amaranta は時が来たのを見ると、晩餐もお話しも終わったと告げて松露と上等のワインを薦めるが、女性は二人しか手を出さずやがて寝室へと去り、男性も一部は Fileno の部屋へ、残りは自宅へ引き上げた。

『晩餐』の第三日目にはあと一篇作品がのこされているが、冒頭の部分が欠けているために語り手も番号も不明のままである。従来この作品は第三日目の最初の部分に掲載されて来たが、Salerno Editrice (1976) 版の監修者 Riccardo Bruscagli はその作品を同書の巻末に収録した Novelle Magliabecchiane という三篇の作品集の最後の作品として掲載している。まずこの作品集の概略を示した後前述の作品の梗概を記しておく。

まず冒頭の Nota introduttiva において監修者は、作品研究に於ける Magliabecchi 版の重要性を解説している。

続く *Il Lasca a Masaccio di Calorigna* は、Grazzini から Masaccio という悪友に宛てた献辞で、G. は相手にこの作品集を送る理由が二つあり、相手が『晩餐』を良く読んでいるので今更説明を書き加える必要がないことと、相手がこの上なく恩知らずの無礼者なので、称賛を求めている等と誤解される心配がないからだと説明している。三篇を選んだのは、短いものの中で最も短いものと中ぐらいの中で最も長いものと、長いものの中で最も長いものであると同時に、喜劇と悲劇とその中間のものを選んだとしている。

しかし、献辞は嘘で、第一日目のからは選ばれず作品ⅠはⅡ-2の Falanno を騙す話、作品ⅡはⅡ-1を中心にⅡ-3、Ⅰ-5をミックスして、せっかく Lazzero に成り済まして元の妻と再婚した Gabbriello が Maddalena にうつつを抜かし、嫉妬に狂った妻に告発されて処刑され、妻も子供達を殺して自殺するという話に改作されている。作品Ⅲは以下に記す一種の *pornografia*、『晩餐』Ⅲ-?である。

『晩餐』Ⅲ-? (Grazzini *la Gelosia*, *Le Cene* Ⅰ-7, *Decameron* Ⅲ-6, Ⅲ-8, Ⅲ-9, Grasso *legnaiuolo*) 語り手不明

フィレンツェに Bartolomeo degli Avveduti という賢くはないが金持ちの貴族がいて、Ginevra という才色兼備の若い妻に恵まれながら、裏口に面したやりて婆あの家に出入りする女たちを眺めている内に Arrighetto という若者の情婦 Lucrezia にほれ込んでしまう。A. の友人 Ruberto はG. を恋してB. の屋敷を偵察中にこれに気付く。A. は友人のために一芝居打とうと計画し、婆あに10ドゥカート出せばL. に会えると伝えさせる。約束の夜A. が突然L. を連れだしたためB. はますますのぼせて、溜息をつき妻に悟られそうになる。B. が近くの教会に呼び出した婆あにせがむと、婆あはA. の下男へのチップ2ドゥカートを上乗せして合計12ドゥカート出せば、A. の下男が別の家で逢引き出来るよう手配してくれると約束する。それはA. が叔父 Marco の留守中番をしている家で、その夜約束の時刻にB. が訪ねて行くと、L. と下男はB. を迎えた後地下室へ案内し、L. が気負い立つB. を巧みに全裸にした途端、示し合わせたとおりA. 達が帰宅、L. がB. を便所に隠れさせた後、A. 達はB. の衣類も持物も全部取り上げてしまう。A. 達は市場の小僧に、その衣類を証拠に持たせてB. の妻G. のところへ使いさせ、その夜は遅くなるので鍵だけして門をしないようにと伝言させる。再びA. 達が出掛けたが、脅えたB. がやってきたL. にもう帰るといって、L. が悲しむ振りをして引き留めた揚げ句、R. 達が間もなくやって来るとあわてた振りをして、水とパンだけを与えてB. を再び便所の中に閉じ込めてしまい、彼女自身はA. やR. と御馳走を食べる。その後A. やR. はB. の屋敷を訪れ、R. はB. の財布から抜き取った鍵を使って侵入し、二階のG. の寝室を訪ねると、中ば眠っていたG. はR. が夫だと信じて彼を招き入れ、途中で夫とは別人だと気付いてR. を叱るが、若さの魅力で説得されて仲良くなってしまう。その夜A. の叔父の Marco 夫妻が真夜中に突然帰宅して、下男に戸を開けさせたため、勝手に入り込んでいたA. の情婦だ

がまだ小娘のL. は、どうしていいか分からず、B. を地下室の便所に閉じ込めたまま逃亡してしまう。M. 夫妻は旅の疲れですぐ寝室に入り眠りこむが、妻が夜中に目を覚まして便所へ行くと、中にいたB. はてっきりL. が来てくれたと信じて手を握り、たまたまM. の妻の名前がA. の情婦と同じ Lucrezia だった為に、妻は相手が夫だと信じて寝室へ連れ戻って交わり始めると、その最中に夫が目覚まし、妻のベッドで発生した事件を目撃して、びっくりして騒ぎ立て、夫人も自分の誤りに驚く。M. は妻を叱り飛ばして下男と一緒にB. を縛り上げ、自分は警察へ訴えに出掛けた。妻は下男から事情を聞き世間体を考えてB. を逃してやり、戸を閉めてしまう。M. が警察の隊長とその部下達を連れてやって来ると、下男はゆっくりと戸を開け、妻も後から起きて来て、二人は口を揃えて何もなかったと言う。隊長は警察を侮辱したとM. を叱り、しつこく訴えるM. に腹を経て牢屋へぶち込む。B. はようやく自宅に戻るが、R. と仲良くなったG. は女中に指示して裸同然のB. を、奥さんに知れては大変だと脅させて、地下室に閉じ込めさせてしまい、食事などを運ばせてその間にR. を送り出す。M. の妻L. は武勇に優れて警察隊長とも親しい有力者の兄 Palmieri degli Armilei という人物を呼んで、ちかごろ夫が夢遊病にかかっている、夜中にさまよっては、ありもしない幻覚を見たと言っていて、牢屋に入れられてしまったので、貰い下げに行き、ついでに説教して欲しいと頼む。兄は妹の頼みを聞き入れて、義弟を牢屋から救い出し、妹の名誉を汚すようなことを口走らぬよう義弟に十分意見をしたので、M. はその後口を慎み、生涯夫婦仲は円満だった。他方A. は、Palla の薬屋からパドヴァ大学でユダヤ人が調合した、たっぷり四時間は何も知らずに眠らせる阿片を用意して、B. の女中の手で葡萄酒に混ぜてB. に飲ませ、B. が眠っている間に彼をいつも寝ている寝室に運び込み、衣類や持物のみならず12ドゥカートまでそっくり返しておく。目を覚ましたB. は何が何だか分からず、M. の家をフィレンツェ中捜し回るが、結局分からず仕舞いで、余り驚いたため気が変になり、妻をひどく恐れる無害な狂人となった。かくしてG. 夫人は田舎から子供を呼び寄せて、家政の一切を取り仕切る傍ら、長年にわたって若い恋人R. と毎晩ひそかに愛し合いながら、ついに誰にも悟られることはなかったと言われている。

(本ノートは文部省科研一般研究(c)－(2)による研究の一部である。)

(1990. 9. 18 受理)